

故 高倉新一郎先生を偲ぶ

歴史学者、巨星高倉新一郎先生は平成2年6月7日、89才の天壽を全うされて永眠されました。我々は惜みても余りあることで哀悼の意を表する次第である。

先生は帯広の地にご出生になり、幼くして英才の誉高く、札幌第1中学校、北海道帝国大学農業経済学科ご卒業というエリートコースを終えられた。同学科は佐藤昌介、高岡熊雄、上原徹三郎（初代北海学園大学学長）諸先生という日本殖民学の殿堂にお育ちになり、第2次大戦前より歴史学の研究に没入され、多数の著書、論文を表わされている。我が北海道地理学会には度々ご出席を頂き、若い我々に温い言葉をおかけ頂き感謝している所である。特に名誉会員としてご教導を頂いていた次第である。先生のお仕事は歴史、文化、その他多数に及ぶので、ここでは地理学と関係の深いと考えられる一端を記して報恩としたい。

先生は昭和44年6月8日、北海道地理学会春季大会で、北海学園大学学長をしておられたご多忙の先生に「史料としての北海道地図」と題して、多数の北海道古地図を教材として、感銘深い記念講演を賜り、珍しい地図に目を見張ったものであった。

先生は精力的な真面目な性格の着実にお仕事をされる方で、多数の著書、論文の中から、比較的地理学に関係が深いと思われる2～3の目にふれたご業績を列挙してみると（先生にはお叱りを受けることを覚悟し、紙面の関係上数点をあげてみる）、以下の通りである。

昭和17年12月 「アイヌ政策史」

昭和22年3月 「北海道拓殖史」

昭和62年9月 「北海道古地図集成」挿入地図90図その他多数の著書がある。

論文も多数あるが、中でも

昭和14年10月 我が国に於ける樺太地図作製史

昭和15年5月 我が国に於ける千島地図作製史

昭和17年9月 我が国に於ける北海道本道地図の変遷(1)

昭和27年3月 我が国に於ける北海道本道地図の変遷(2)

昭和31年3月 北海道地図の変遷補遺

平成2年6月 蝦夷接壤全図 北のいぶきNo.18 (No.1～18まで古地図カラーを挿入され、これが絶筆のようで記念すべき号となっている。北海道開発庁（出版物）その他多数で記載できないのが残念である。

先生は仕事も沢山されておられるが、その一端を述べると、先は略歴であるが。

昭和21年9月 北海道帝国大学教授

昭和30年5月 北海道大学附属図書館長
 昭和32年4月 北海道大学経済学部長
 昭和32年4月 北海道大学生協同組合理事長（日本の生協の誕生）
 昭和37年12月 新北海道史編集長
 昭和41年4月 北海道大学名誉教授
 昭和43年6月 北海道学園大学学長（恩師初代学長上原徹三郎先生のあとを受けて）
 昭和44年11月 北海道文化賞（教育・科学）
 昭和46年5月 北海道生協連合会長
 昭和55年9月 北海道開発功労賞（教育の振興と郷土史の研究に貢献）
 昭和55年1月 北海道立開拓記念館長
 昭和56年3月 北海学園大学 名誉学長

受賞されたことは、以上のほかに

昭和24年 北海道新聞文化賞

昭和40年 産業教育功績者、表彰

昭和59年 地域文化功労賞

以上のように各方面で活躍され、多方面に尽力されていて枚挙にいとまがない程である。

昭和4年1月に令夫人とき殿とご結婚になり1男1女をもうけられ、仲、睦まじくダイヤモンド婚を終えられ傘寿や米寿のお祝いを終えられた。

先生の人生を観ると教授になられた時は終戦で殖民学はマッカーサー指令で講義ができず、また北海学園学長の始めの頃は学園紛争の最中でたいへんな苦難を乗り越えられた事であったと推察する。

晩年はご夫婦で海外旅行にもいかれ、令夫人は歌をよくされ、たのしみも多かった事と拝察します。高倉とき子著「ウィーンの塩」昭和63年出版がある。

国家は先生の人徳と業績に対し

昭和50年 勲二等瑞宝賞

平成2年 従三位に叙せられました。（没後）

先生は親分肌で地理学専攻の我々の面倒もよく見て下さった。先生のお好きだったオルゴールの音を耳にしながら皆様と共に、心より御礼申し上げご冥福をお祈りする次第である。

私などはそれにしても、より多くのことをお教え頂いておくべきだったと悔が残るが、幸にしてご子息高倉嗣昌氏（北大医療短大教授）が我々の仲間として仲好く勉学して居られることもあり、あの世から我々にご指導、お力添えをお願いし、書き足りませんが、公私共にお世話になった兄のような先生を偲びつつ擧筆する次第である。

（筒浦 明、北海学園大学名誉教授）